

お茶の間学Ⅱ

生活特報部 FAX 092 (711) 9056 メール seikatsu@nishinippon-np.jp

京都大学の鈴木祥之名誉教授が伝統構法に興味を持たれたのは、1995年に発生した阪神淡路大震災がきっかけでした。木造住宅が全壊に近かった神戸市内に比べ、伝統構法で建てられた住宅が多かった淡路島のある地区では、それほどの損傷も受けることなく木材住宅が残っていたということです。

現状では、変形に耐える「木材の強度」が全ての基準になるため、単に丸太を製材した無垢材より、何枚もの板を張り合わせた集成材の方が強いといわれます。でも、こうした工業製品のようにパターン化された材の

もり 森林をつくらう 脊振の地から

8 佐藤和歌子

問題の本丸は建築に

使用は、現場にある材に合わせ、現場で職人さんが加工する技術や、適材を適所に使う力を養う機会をなくします。

「私は建築の研究者の一人として、どうかして日本の木造建築技術を継承できる職人を残したい。彼らの技術が継承されたら、木材の特性を見抜く技が残される。そうすれば、あなたがたのいう良質な木材を育てる必要がある環境を確実に残せるのですよ」

古民家の骨組みで、曲がった木が、なんとも器用に組み合わされているのを見たことがありますか。それは、現場の職人が木の癖を見抜き、それを個性として、どうにかして日本の木造建築技術を継承できる職人を残したい。彼らの技術が継承されたら、木材の特性を見抜く技が残される。そうすれば、あなたがたのいう良質な木材を育てる必要がある環境を確実に残せるのですよ」

ない日本の大学の環境は、そうした原理をほとんど知らない設計者を生み出します。つまり、下流からそうした要望が生まれなければ、森林から産出される木材の質は問われない。山主が、手塩にかけて木材を育てる意義もまた失われます。

言い換えると、木材を無料配布したり、単に木材利用が環境保全に貢献すると訴えたりするような、従来型の国産木材PR事業だけでは好転しない理由がここにありました。問題の本丸は建築という下流行程にあったのですから。

木材を利用する過程全てに関わる人たちが、何か一つでも思いを共有することができれば……。そう思った私は、学生を対象にした設計コンペの審査委員長を鈴木先生にお願いするつもりで、募集要項に「伝統的構法による木造住宅のプランを提案すること」と入れることにしました。

しかし、木造の研究も勉強もほとんどでき

(NPO法人「森林をつくらう」理事長、佐賀県神埼市)



適材適所を考え、墨付けをする大工さん。伝統構法では木の特性を見分ける目が求められる